【論文】

三つの奪冠物語
――ジャック・ロンドン「さよなら、ジャック」再評価の試み――

新　井　英　永

Three Stories of Dethronement: A Reevaluation of Jack London's "Good-by, Jack"

Hidenaga Arai

要旨（Abstract）
This article deals with Jack London's "Good-by, Jack" (1909), part of his "leper trilogy," in order to reevaluate both it and its author in general. Specifically, the artful combination of Jack Kersdale's story of dethronement with the tragedy of Lucy Mokunui, who, falling from her queen-like position, cries "Good-by, Jack! Good-by!" is elucidated. In addition, I suggest that the narrator does not escape dethronement either, by examining the relation of the dethronement of Mokunui and Kersdale with the narrator and the narration, and the implications of the title "Good-by, Jack."

キーワード（Keywords）：ジャック・ロンドン、ハワイ、モロカイ島、ハンセン病、奪冠、悲劇

Ⅰ　はじめに

ジャック・ロンドン（Jack London 1876-1916）といえば、『野生の呼び声』（1903）や『白い牙』（1906）など北米の雪に覆われたアラスカやカナダ・ユーコン川流域におけるゴールドラッシュ時代を背景にした作品を、まずは思い浮かべる向きが依然として多いかもしれない。しかしながら、ジャック・ロンドンは、イギリス・ロンドンの貧民街や日本、ハワイ、タヒチ等を放浪あるいは取材しており、世界的な旅行作家としての知名度も低くはない。池澤夏樹は2014年の柴田元幸との対談「どこまでもアメリカ的なジャック・ロンドン」で、「ロンドンはハワイの自然とユーコン川の自然の違いを巧妙に使った。南と北」と述べ、「土地に対して開けた」作家であるジャック・ロンドンにとっては、「北」だけでなく「南」も重要であったことを示唆している（102）。また、柴田元幸は、同誌上に新訳『野生の呼び声』を掲載しながらも、「ロンドンの場合、特に第一作の輝きがものすごくあるとかではなく、年を重ねるに連れて、波はありますけど、技巧的にはだんだんうまくなっていった」と指摘している（105）。

一方、翌年の同誌での村上春樹との対談「帰れ、あの翻訳」で柴田は、ジャック・ロンドンがアメリカであまり読まれなくなっている現状を紹介している。村上は、「ジャック・ロンドンはリバイバルの価値がある」と受け、『荒野の呼び声』や『白い牙』以外にもいい作品がたくさんあるとし、「ハンセン氏病の患者を扱った悲しく美しい小説」に言及している（7-8）。ハワイ・カウアイ島に住んでいたことのある村上は、モロカイ島のハンセン病患者コロニーも訪れたことがあり、同誌同号にカウアイ島を舞台としてハンセン病を扱ったジャック・ロンドンの短編小説「ハンセン病者クーラウ」

（村上訳では「病者クーラウ」）を訳出している（30）。村上の言うハンセン病を扱った小説とは、この「ハンセン病者クーラウ」、ならびにこの短編とともに『高慢の館とその他のハワイ短編集』（*The House of Pride and Other Tales of Hawaii,* 1912）に収録されている、「さよなら、ジャック」、「コナの保安官」である。これら三作品のなかでは「ハンセン病者クーラウ」の評価・知名度が圧倒的に高く[1]、他の作品はその陰に隠れている印象が否めない。

『ジャック・ロンドン再読』（*Rereading Jack London*, 1996）所収のジェイムズ・スラーゲル（James Slagel）「政治的ハンセン病：『カマアイナ』ジャック・ロンドンとハワイ人クーラウ」（"Political Leprosy: Jack London the 'Kama'āina' and Koolau the Hawaiian"）が詳細に論じているのも「ハンセン病者クーラウ」である。しかしスラーゲルは、「ハンセン病者クーラウ」と「さよなら、ジャック」、「コナの保安官」を「ハンセン病三部作」と名付け比較検討も行なっており[2]、次のような帰結を導き出している。三部作に共通するテーマとしての「ハンセン病」は、「呪い」であると同時に「名誉の印」のようなものである。マリヒニ（よそ者）である「さよなら、ジャック」の主人公ジャック・カーズデイルは、ハンセン病者であるとは描かれず読者である我々は同情することがない。「コナの保安官」のカマアイナ（土地の人＝ハワイ在住者）である主人公ライト・グレゴリーは、ハンセン病の罹患と故郷（ハワイ島コナ）への想いにより同情を引き起こす。ハンセン病の症状が顕著なハワイ人クーラウはその威厳と土地（カウアイ島）との一体化を保持するための闘争により最も尊敬を勝ち得ている。スラーゲルによれば、ハワイ人ではないが単なるよそ者でもないグレゴリーは、カーズデイルとクーラウの中間に位置する。この中間点であるカマアイナ（土地の人）の立場こそ、クーラウになりようがない作者ロンドンや読者が達しうる境地であり、我々読者は作者ロンドンのように、そしてロンドンを通して、カマアイナ（土地の人）になれるよう努力することになる。

ロンドンの小説の評価・知名度に関する限り、ハンセン病を扱った作品の中では「ハンセン病者クーラウ」が優位という傾向は、スラーゲルにおいても大きな違いはない。だが、スラーゲルが提示した三短編の主人公の類型化は、「ハンセン病者クーラウ」以外の二短編に関する議論の出発点として有効である。本論考はこの類型化を活用しつつ、ハンセン病三部作のうち「さよなら、ジャック」に焦点を絞って再検討し、ジャック・ロンドン再評価の流れに掉さすことを目指す。具体的には、この短編において、「さよなら、ジャック」という別れの言葉の発話者であるルーシー・モクヌイが女王に比せられるような地位から転落する悲劇に、ジャック・カーズデイルが「王冠」を「剝奪」される「悲劇」が巧妙に組み合わされていることを明らかにする。さらに、これら二つの「奪冠」の物語と語り手ないし語りの関係についても考察し、語り手もまた「奪冠」を免れていないことを示す。

Ⅱ 「逆さま」な国ハワイ

ジャック・ロンドンの「さよなら、ジャック」（"Good-by, Jack"）は、1909年雑誌に掲載され、1912年に『高慢の館とその他のハワイ短編集』に収録された。その筋（プロット）は、アメリカ合衆国から移住した宣教師と商人の家系に属するジャック・カーズデイルが、ハンセン病に罹患した有名なハワイ人女性歌手ルーシー・モクヌイの隔離収容先への船出の場面を目撃し、以前の交友関係から自分も罹患しているのではないかと驚愕する、というもので平明である。しかしながら、簡素な筋には「認知（アナグノーリシス）」と「逆転（ペリペテイア）」、「苦難（パトス）」という「悲劇」[3]形式の三要素のみならず、伏線として様々な出来事や描写が織り込まれている。加えて、ハワイの歴

史・社会を背景にした主人公の来歴やハンセン病という極めて重大かつ深刻な問題に関する記述が組み合わされているため、短編のわりには広がりと重層性を感じさせる作品である。

ジェイムズ・スラーゲルは、カーズデイルによるハワイの異教的な自然や文化の享受は表層的なものであり、彼とハワイの土地や人々のあいだには形式的でよそよそしい関係しか成立していないと捉える（187）。よって、ハワイで生まれ育ったにもかかわらず、カーズデイルは最後までマリヒニ（よそ者）であり続ける、というのがその主張である。しかしながら、カーズデイルはスラーゲルが想定するよりも深くハワイと交わり、その結果、彼とハワイの土地や人々とのあいだには相当に親密な関わりがあるように見える。そうした関係がなければカーズデイルの「王」のような地位は築かれず、その地位からの転落という「悲劇」も起こりえなかったのではないだろうか。以下この節では、語り手によるハワイの歴史とカーズデイルの来歴の説明を分析し、語り手自身の立ち位置を確認する。

この短編小説は、次のようなハワイの奇妙さに関する一人称の語り手の言明で始まる。その記述は、テクストの物語内容と筋の展開をどう読者が把握すべきかに深く関わっている。

> ハワイは奇妙な場所である。社会的に何もかもが言ってみれば逆さまなのだ。もっとも物事の筋が通っていないというのではない。筋が通りすぎているくらいだ。それでも物事はいわば上下逆である。（中略）名もなく、殉教することを目指すはずの宣教師が、金持ちの貴族階級の上座にすわる。（“Good-by, Jack” 178）[4]

冒頭「奇妙な場所」であるハワイでは社会的に全てのものが「逆さま」（topsy-turvy）であると宣言される。そのように社会の秩序が転倒しているにもかかわらず、筋が通っているとはいかなる状況なのか。読者はいきなり二律背反の状態に置かれつつも、続く記述から、その具体的な転倒状況が分かる。つまり、それは下位の者であるはずのニュー・イングランドの宣教師たちが上位に位置し権力を手中にしたことを示している。

次に続く以下の語り手の説明では、上座を奪われた者はカナカ（ハワイに住むポリネシア系先住民）であり、この立場の逆転は、キリスト教による異教の排除がもたらしたとされる。

> 1830年代にやって来た謙虚なニュー・イングランドの人々は、先住民に真の宗教、すなわち唯一無二の紛れもない神を崇拝することを教えるという気高い目的のためにやって来た。彼らはその目的をみごとに果たし、カナカの文明化にも成功したので、第二ないし第三世代までには、カナカは絶滅したも同然となった。これは福音書の種が実を結んだのであり、宣教師たち（その息子や孫）が蒔いた種は、ハワイの島々そのもの――土地、港、町の用地、サトウキビ農場――を所有するというかたちで実を結んだ。命の糧を与えるべくやって来た宣教師が、この地にとどまり異教徒のごちそうをまるごと貪ったわけである。（178）

ここに記されているのは、最後の行がまとめているように、食を与えるはずの人が逆に食を奪うという倒錯した事態である。しかし、その前の部分にあるように、ニュー・イングランドから来た宣教師たちは物理的な食は与えていないが、精神的な食（命の糧）としてのキリスト教を与えるという目的は達成している。それゆえ、彼らはカナカ（先住民）の「文明化にも成功し」、「カナカは絶滅したも

同然となった」。

語り手によれば、二律背反に見えるものが実は理にかなっている、つまり「逆さま」(topsy-turvy)であり上下逆(upside down)であることが「筋が通りすぎているくらい」であるのがハワイという奇妙な場所である。このハワイの状況を、語り手が把握するキリスト教に即していえば、倒錯しているように見えてもその状態こそがニュー・イングランドの宣教師たちの目的であり、その帰結は筋が通ったものであり当然の成り行きである、ということになる。したがって、第一段落の内容は、アメリカ帝国主義下のハワイの位階秩序を肯定する語り手の現実認識の提示、あるいは語り手のそうした立ち位置の表明として把握することができるだろう。

Ⅲ ハワイの白人「王」ジャック・カーズデイル

語り手によると、以上の第1段落におけるニュー・イングランド人宣教師の話は、ハワイのことを語ろうと思えば避けて通れないから話したまでで、本題はジャック・カーズデイルについてである。第二段落では、この短編の主人公であるジャック・カーズデイルが、祖母は宣教師の家系、祖父は商人の家系の人物として紹介される。この祖父ベンジャミン・カーズデイルは、ニュー・イングランドの商人であり、安物のウイスキーとジンの販売から百万長者にまで上り詰めた。ハワイが「奇妙な場所である」ことに加え、ここで「もうひとつの奇妙なこと」とされるのは、この祖母と祖父の家系の合流である。というのも、利害が衝突するため「かつて宣教師と商人は、不倶戴天の敵だった」からである。にもかかわらず、「彼らの子どもたちは、婚姻関係を結び島を分け合うことで、和解に至った」。この敵同士の婚姻関係という一見倒錯した事態も、島を分け合い支配するためにはきわめて理にかなった結びつきであり、語り手が冒頭で述べた「物事の筋が通っていないというのではない」ことの一例と言えるかもしれない。ともあれ、先述の階級的・宗教的逆転に続くこの宣教師と商人の和解・結託による二重の「奇妙さ」により、カーズデイルの家系は成立している。これはとりもなおさず、ジャック・カーズデイルという存在自体が「奇妙な場所」としてのハワイの縮図であることを意味するだろう。

次の段落に入ると、白人男性がハワイの魅力の虜になる様子が描かれる。ジャック・カーズデイルもハワイの土地と人間に夢中になった一人である。これにより分かるのは、カーズデイルは宣教師と商人の奇妙な関係だけでなく、ハワイの自然・文化と白人男性社会との奇妙な関係によって形成された人物だということである。

> ハワイでは肉体は黄金色である。土地の女たちは日に焼けた古代ローマの女神ユノで、男たちは褐色の太陽神アポロだ。彼らは歌い、踊り、みな花の宝石で身体を飾り、頭に花の冠を戴いている。そして、厳格な「宣教師連中」をのぞけば、白人の男たちはその気候と太陽の誘惑に屈し、どんなに忙しくとも、踊って歌い耳のうしろや髪に花を飾ろうとする。ジャック・カーズデイルも、こうした男仲間たちのひとりだった。彼は私がいままで出会ったなかでも、もっとも多忙をきわめた男のひとりである。そして、百万長者を何人も合わせたほどの大富豪だ。砂糖王であり、コーヒー農園の経営者であり、ゴムの開拓者であり、牧場経営者であり、ハワイ諸島の新興企業四つのうち三つの創立者だった。社交界の男で、高級クラブに通い、ヨットを所有し、独身、そのうえ、結婚適齢期の娘を持つ母親たちにちやほやされるハンサムな男でもあった。ちなみに出

身大学はイエールで、その頭には私の出会ったどんな島民よりもハワイに関する重要な統計データと学術的な情報が詰めこまれていた。たくさんの量の仕事をこなしながらも、ほかのどんな怠け者にも引けをとらないくらいたくさん歌って踊って髪を花で飾りつけていた。(179、傍点引用者)

このようにハワイの人々と自然は異教的な生命力に満ちた存在・世界として描写されている。その魅力に抗えず惹きつけられる白人男性とカナカ（先住民）の関係は、第一段落におけるニュー・イングランドから来た宣教師たちと彼らに「文明化」された先住民の対立関係とは異なる印象を与える。というのも、第一段落末尾の「命の糧を与えるべくやって来た宣教師が、この地にとどまり異教徒のごちそうをまるごと貪った」という記述からは、キリスト教徒による異教徒の一方的で暴力的な搾取の構図を思い浮かべるのに対し、この第四段落で描写される自然の誘惑に屈し踊って歌う白人男性は、厳格な宣教師たちから見れば堕落したキリスト教徒であろうし、異教徒を搾取したというよりは逆に彼らに取り込まれているように見えるからである。

結果として、第一段落における宣教師とハワイ先住民（ネイティヴ・ハワイアン）の二項対立に変化が生じている。「厳格な『宣教師連中』」をのぞいて、白人の男たちが先住民側についたとなれば、対立するのは宣教師たちと白人男性を取り込んだ先住民である。事実、カーズデイルたちは厳格な「宣教師連中」からはっきりと区別されている。また、引用最終文の「怠け者」は、髪に花を飾って踊りや歌に興じる白人男性とともに、先住民をも含みうる。つまり、歌や踊りを楽しむカーズデイルは、この怠け者集団の一員であることにより、先住民に相当に接近していると考えられる。けれども、「怠け者」に引けをとらないとはいえ忙しいことも強調されている白人男性が、忙しくないと暗に想定されている先住民に完全に同化したとは考えにくい。よって二項対立は、キリスト教世界（厳格な「宣教師連中」）と異教世界（先住民）のあいだに誘惑に抗えない白人の男たちの世界が現れ、三項対立に変化したと言えるだろう。

ニュー・イングランドからやって来たのが、ハワイの自然や人々からの文化的影響を忌避する宣教師のような人たちだけであれば、その後のハワイの社会状況は異なっていたかもしれない。忙しく仕事をこなし続けながらも「怠け者」に負けないくらい遊び、ハワイの自然・文化の中に入っていったカーズデイルのような人間たちがいたがゆえに白人によるハワイ支配が逆説的に成立した、とテクストは示唆しているように考えられる。ともあれ、このように宣教師と商人の混合あるいは中間領域からであると同時に、宣教師の厳格な世界と先住民の享楽的な世界の中間領域から、ジャック・カーズデイルという財産や権力、社会的地位、名声等を兼ね備えた大立者は立ち現れている。異教の神々の世界の誘惑に屈した白人男性ではあるが、彼のダンスや歌の余暇の時間と仕事の時間は相互依存の関係にあり、宗教と商業、異教世界とキリスト教世界、自然と文明、感情と理性等の融合あるいは結合により、カーズデイルはハワイにおける「王」のごときリーダー（指導者）の地位についている。

続く第五段落では、カーズデイルがいかに勇敢な人物であるかを示すエピソードがいくつか紹介される。語り手によれば、その目的はカーズデイルが臆病者でないことを明らかにするためであり、「私の話とは関係がない」(180)。しかしながら、これらはみな伏線であり、これほど勇敢なカーズデイルでさえ震え上がらざるをえないほどハンセン病は恐ろしいものであることを劇的に示すために挿入されている。以下では、二つのエピソードの主要な含意を確認しておきたい。

一つはカーズデイルの政治的な闘争についてのエピソードである。彼は、「ハワイ王朝が転覆された先の革命のとき、じつに立派で勇敢なはたらきを見せた」(179)。たしかに、カーズデイルが、政治に興味を持つ人間であるという事実、ならびにハワイ先住民の側ではなくハワイ王朝を転覆させる側の人間であったという事実は重要であろう。スラーゲルはこうしたカーズデイルの政治への関与から、彼の住む裕福な特権的世界と先住民の世界との断絶を指摘する。実際、ハワイ王朝が転覆された後の世界でカーズデイルは「王」のごとき地位を占めるに至る。しかしながら、カーズデイルの経歴を整理し推察するならば、白人側の世界から外に出ずにその地位に上り詰めることができたわけではない。ここで言及されている革命とは1893年のクーデターを指すだろう[(5)]。語り手の言うようにカーズデイルが当時「16歳を超えていなかった」とすれば、彼のハワイ王朝転覆への関与は、「たくさんの量の仕事をこなし」ながらも、歌ったり踊ったりして先住民と交流していた時よりも前であろう。つまり、彼は「革命」(クーデター)によりハワイ王国が共和国に変わった後に、アメリカの名門イエール大学で学び、そこで得た知識や情報をハワイの開発に利用しようとした。と同時に、その過程で彼はハワイの自然や先住民の文化のなかに深く惹きつけられもした。そうであるがゆえに、その帰結として、後述するような彼の「悲劇」が起こるわけである。

もう一つのエピソードは、ハワイ島コナにおけるムカデにまつわる出来事である。カーズデイルと語り手がグッドヒューという医師の暮らすバンガローを訪れたとき、カーズデイルはその場にいたドッティー・フェアチャイルドという女性の髪に落ちてきた巨大なムカデを、噛まれながらも、つかんで取り出す。こうしてこの女性を救った際ムカデの毒により、翌朝カーズデイルの腕はふくれ上がり、腫れが引くまでに3週間を要したとされる。この時のムカデに対する自らの恐怖の「千倍の恐怖に打たれるカーズデイルの姿」を後に自分は目にする運命にあった、と語り手は予告している。このカーズデイルの勇敢さと高潔さを示す武勇伝は、後の彼の態度とのギャップを作り出すだけでなく、後述するように、女性や傷病をめぐる対照を際立たせる役割も担っている。

Ⅳ ジャック・カーズデイルとハンセン病、そしてルーシー・モクヌイ

こうした前置きを経て、ムカデの毒にらい菌が対置されるように、本題であるハンセン病の話が導入される。カーズデイルはハワイの様々な事柄について「百科事典的知識」を持っており、彼の「趣味の一つ」であるハンセン病も例外ではない。土地の人々は、ハワイ全島のハンセン病患者が収容されているモロカイ島の隔離施設について、明るい将来への希望など患者が持ちようのないむごたらしいところである、と噂していた。こうした見方に対して、この施設を熱烈に支持しているカーズデイルは、語り手を相手に次のようにまっこうから反論する。

> 「彼らはあそこにいて幸せなんだ」とカーズデイルは言い張った。「それに、外にいるハンセン病とは無縁の友人や親戚よりも、はるかにいい暮らしをしている。モロカイ島の恐怖なんて、まったくのたわごとだよ。なんなら、世界じゅうの大都市にある病院やスラム街に連れていって、あそこの千倍の恐怖を見せてやってもいい。なにが生ける屍だ！ なにがかつて人間だった生きものだ！ くだらん！ その生ける屍が、7月4日の独立記念日に馬で競争するところを見てみるといい。なかには、ボートを所有する者たちもいる。一人のはガソリン式のランチ(大型ボート)だ。楽しく過ごすこと以外にすることは何もない。衣・食・住、そして医療も、なにもかも揃っ

ている。彼らはアメリカ準州の施設の収容者だからね。気候だってホノルルよりよっぽどいいし、景色もすばらしい。ぼく自身、残りの人生をあそこで過ごしたってかまわないくらいだ。すてきな場所だよ」(181、傍点引用者)

カーズデイルによれば、モロカイ島の生活は満ち足りていて快適であり、ハンセン病患者たちは存分に楽しんで暮らしている。オアフ島にあるホノルルより気候も恵まれている。カーズデイルは、残りの人生をそこで過ごしてもいいとまで言っている。

次にカーズデイルは語り手に、ハンセン病の専門家で第一人者であるハーヴィ医師とその細菌検査について説明する。カーズデイルによれば、「ハンセン病の治療法が見つかるとすれば、彼が見つけるに決まっている」(6)。疑いのある者から皮膚を少し切り取って検査するだけでハーヴィ医師にはすぐに感染しているかどうかが分かるので、「疑わしいならハーヴィ先生のところに行って診てもらうといい」とカーズデイルは語り手にアドバイスする。これも一種の伏線で、現実にハーヴィ先生に診てもらうことになるのは「千倍の恐怖」に打たれるカーズデイル自身である。

語り手は後日カーズデイルに誘われ、モロカイ島に船で移送されるハンセン病患者たちを見に波止場まで行く。カーズデイルにより移送の関係者であるモロカイ島の施設長や医師に紹介された後、語り手は悲惨な症状を見せる患者のなかに「顔立ちの良い」人たちが混ざっているのに気づく。その一人が、「美しい女性で、純粋なポリネシア人」のルーシー・モクヌイである。彼女は、語り手には、「歳はせいぜい23か24」で、「首長の家系の子孫」であるとしか思えない(183)。

ホノルルにあるカリヒというハンセン病患者一時受け入れ施設ですでに顔を合わせていた衛生局のジョージズ医師が、地位や富のある者たちを含む白人の憧れの対象であったこのルーシー・モクヌイについて次のように語り手に説明する。

「ルーシー・モクヌイのことを聞いたことがない！ ハワイの歌姫ですよ！ いや、失礼。もちろんあなたは新参者(マラヒニ)ですから、知っているはずもないか。そう、ルーシー・モクヌイは、ホノルルでいちばん愛されていました――いや、それをいえばハワイでいちばんです。(中略)十数人もの「ハオレ」が――失礼、白人のことです――かつて彼女に心を奪われたものです。有象無象の輩は数に入れていません。その十数人のハオレは、地位と名声のある人たちでした。」

「彼女なら、望めば裁判長の息子とだって結婚できたでしょう。美しい人だとあなたも思うんですね？ でも、彼女の歌をこそ聴くべきですよ。ハワイで最上の地元女性歌手ですから。その喉は純銀でとろける陽射しのような歌声。みんな彼女を崇めていた。アメリカを巡業したこともある。最初はロイヤル・ハワイアン・バンドと一緒に、そのあとひとりでも二回――コンサート活動です」

「あっ！」と私は声を上げた。「思いだしました。二年前、ボストン交響楽団で彼女の歌を聴きました。そうか、あの女性か。いま分かりました」(184)

短編冒頭部では、アメリカ・ニューイングランドからの宣教師たちの描写に続いて、ギリシャ・ローマ神話に比せられた太陽と花、歌と踊りに満ちた始原的世界としてのハワイが描写されていた。ルーシー・モクヌイはその世界の象徴、しかもその世界のいわば頂点に君臨するような存在として位置づけられ

ることが上の引用から分かる。事実、彼女はすぐ後の箇所では、「ポリネシアのあらゆる魅力的な特徴の縮図であると同時に芸術家であり、男たちの愛を一身に受けていた者」(184) ともされている。

一方、引用中の「かつて彼女に心を奪われた」、「地位と名声のある」白人たちのなかにはカーズデイルが含まれていたと読めるだろう。この地の気候と太陽の誘惑に抗えず、どんなに忙しくとも、踊り、歌い、耳のうしろや髪に花を飾っていたカーズデイルは、個別の恋愛関係としては、この世界の「縮図」であるルーシー・モクヌイの魅力に屈していた可能性は高いと考えられるからである。

しかしながら、アメリカ系白人男性とハワイ先住民女性の恋は実らず、ハンセン病に罹患したルーシー・モクヌイは船でモロカイ島へ送られることになる。彼女の乗船の場面は語り手により次のように描写される。

> カーズデイルとマクヴェイはあいかわらず波止場の反対側の端にいて、熱心に話しこんでいた——もちろん、政治の話だ。二人とも特にそのゲームに夢中だから。ルーシー・モクヌイが私のそばを通るとき、私は彼女を盗み見た。ほんとうに美しい人だった。私たちの基準からしても、美しかった——数世代に一度しか咲かない希有な花だ。そんな彼女が、数いる女性たちの中からよりによって、モロカイに送られる運命にあるとは。彼女は、女王のように歩いて、はしけを渡り、まっすぐ船に乗りこむと、屋根のない甲板を船尾のほうへと進んだ。そこでは、ハンセン病患者たちが手すりのそばに群がって、岸にいる愛する人たちに向かって泣き叫びはじめた。(185、傍点引用者)

カーズデイルが、おそらく「砂糖王」等の称号と地位を持つ上層階級の人間としてであろう、「政治」の話にうつつを抜かしている一方、「希有な花」ルーシー・モクヌイは「女王のように」歩いて船に乗りこむ。彼女は、階級的には上層でも、もともと人種・宗教的に属しているのは異教の文化・社会であり、まさに白人によりその地位や財産を剥奪された者たちの象徴である。

実際、「首長の家系の子孫」であるように見え、「女王のように」歩く歌姫ルーシー・モクヌイの表象から、ハワイ民謡「アロハ・オエ」の作者であるハワイ王国の女王リリウオカラーニ (1838-1917) を連想しないことは難しい[(7)]。リリウオカラーニは、1891年に死去した兄のカラカウア王の後を継いだ女王である。彼女は白人権力が優勢である現状を憂い、ハワイ先住民によるハワイ王朝の復権を企てた。しかし、反発するハワイの白人たちのクーデターにより退位を余儀なくされ、後に「反逆罪」で逮捕・幽閉されることになる。兄にもましてハワイ・ナショナリストである一方、欧米の文化に通じ教養豊かな女王であり、作曲家としても著名であった[(8)]。

ルーシー・モクヌイにリリウオカラーニを重ね合わせた時の政治的寓意（アレゴリー）は明瞭であろう。ルーシー・モクヌイのモロカイ島への隔離は、ハワイ王朝の転覆とその後のリリウオカラーニの幽閉を語っていることになる。カーズデイルはハワイ王朝転覆のクーデターに関わったことになっているが、それをなぞるようにここでも、「女王」の「幽閉」を見送る側に立っている。このように、「首長の家系の子孫」として、またポリネシアの魅力の「縮図」であると同時に芸術家として、さらにハワイでいちばん愛された歌姫としてハワイの社会の頂点にいるべきルーシー・モクヌイが、そこから滑り落ちハンセン病者としてモロカイ島といういわば「奈落」へ「幽閉」されるという物語は、リリウオカラーニ失脚の語り直しと解釈できるのではないだろうか。

V 「さよなら、ジャック」のエンディング：カーズデイルの奪冠

涙にくれる母親に見送られ船上で泣き叫ぶルーシー・モクヌイが桟橋にいるジャック・カーズデイルに気づき、カーズデイルもルーシー・モクヌイの姿を認め慌てふためくのが、以下のクライマックスでありエンディングの場面である。ここで読者は、前半で語り手により予告されていた光景、つまりムカデを見た語り手の恐怖の「千倍の恐怖に打たれるカーズデイルの姿」を目撃することになる。

> 私はルーシー・モクヌイも泣き叫んでいるのに気づいた。不意に彼女は泣くのをやめカーズデイルをじっと見つめた。それから女優のオルガ・ネザーソウルが観客を抱きしめるときのような、愛らしく、官能的なしぐさで両腕を差しだした。そして両腕を広げて、彼女は叫んだ。
>
> 「さよなら、ジャック！　さよなら！」
>
> 彼はその叫びを耳にし、彼女に目を向けた。これほどすさまじい恐怖に襲われた男は見たことがなかった。彼は桟橋の上でよろめき、顔を真っ青にし、服のなかでからだが縮こまり、しぼんでしまいそうだった。彼は両手を振り上げ、うめき声を出した。「なんと、なんということだ！」そのあと彼は必死になって自制心を取り戻した。
>
> 「さよなら、ルーシー！　さよなら！」彼は叫んだ。
>
> 彼は波止場に立ったまま、彼女に向かって手を振り続けた。ノエアウ号がすっかり遠ざかり、手すりに並ぶ人たちの顔がぼんやりとして見わけがつかなくなるまで。
>
> 「てっきりあなたは知っていると思ってました」と彼の様子を不思議そうに眺めていたマクヴェイが言った。「ほかの者はともかくとしても、あなたなら知っているはずだと。だからあなたがここに来ているんだと思っていました」
>
> 「今、知ったんだ」カーズデイルはひどく重苦しい表情で答えた。「馬車はどこだ？」
>
> 彼は足早に――半ば走るように――馬車に向かった。彼に追いつこうと私も小走りにならざるをえなかった。
>
> 「ハーヴィ先生のところへやってくれ」と彼は御者に言った。「できるだけ急いで」
>
> 彼は座席に沈みこみ、息を切らし、あえいでいた。顔がますます蒼白になっていた。唇はかたく閉じられ、額と上唇に汗が吹き出ている。ひどく苦悶しているようだった。
>
> （中略）
>
> 「それにしても知らなかった、まるで知らなかった」と彼はつぶやき、座席に身を沈めると、震える両手で汗を拭った。
>
> 馬車はすさまじいスピードで跳ね、揺れ、街角を曲がりながら傾いたので、話などしていられなかった。もっとも、話すことなどなにもなかったが。それでも彼が何度もこうつぶやくのは聞き取れた。「それにしても知らなかった、まるで知らなかった」（185-86）

このエンディングの場面には、アリストテレス言うところの悲劇における三つの物語構成要素、⑴「認知（アナグノーリシス）」、⑵「逆転（ペリペテイア）」、⑶「苦難（パトス）」が凝縮されている。ルーシー・モクヌイに「さよなら、ジャック！　さよなら！」と呼びかけられたカーズデイルは、驚愕するも必死になって冷静さを装い、あたかもルーシー・モクヌイの出発を知っていたかのように別れの挨拶を返す（「認知」）。さらに、離れ離れになるまでの最後の時間を名残惜しんでいるかのように

桟橋で手を振り続ける。しかし本心では、一刻も早くその場を去り、当地のハンセン病の権威であるハーヴィ先生のところに行き検査を受けたい（「逆転」）、そしてハンセン病に罹患していないことを確認し安心したい（「苦難」）、と思っていることは疑いようがない。

ルーシー・モクヌイが家族やジョージズ医師等関係者以外には話していなかったために初めて知ることになったとはいえ、カーズデイルはなぜこれほど驚愕したのであろうか。その理由は、ルーシー・モクヌイとジャック・カーズデイルがそもそもどのような関係であったか、またその関係を背景にカーズデイルが何を「認知」したのかを確認することで推測できるだろう。この場面の直前までカーズデイルと「政治」について話していたマクヴェイの「ほかの者はともかくとしても、あなたなら知っているはず」と思っていたという言葉から、二人の関係が親密であったことが分かる。つまり、明言されてはいないが、恋人あるいは恋人に近い関係であったと考えるのが妥当であろう。そのためカーズデイルは彼自身も彼女を通してハンセン病に罹患している可能性があることに瞬時に思い至り、その狼狽ぶりが尋常ではなかったのだ[(9)]。周りの人間の目に明らかなほど動揺し、すぐにでも検査を受けたいと思ったにもかかわらず、ルーシー・モクヌイに向かって手を振り続けることにより体面を保ちたかったのは、それだけ互いに、そして世間も認める関係だったからであると思われる。

実際、「さよなら、ジャック！」という呼びかけは、字義通りにはルーシー・モクヌイによる別れの言葉であるが、「愛らしく、官能的なしぐさで両腕を差しだした」状態で彼女が叫んだこの台詞には、あたかも「こんにちは、ジャック」、あるいは「ようこそ、ジャック」という正反対の意味が込められているかのようである。潜在的にであれカーズデイルにはそのように聞こえ、ルーシー・モクヌイの存在・世界に引き付けられたからこそ、その激しい動揺の誘因となったと考えられるのではないだろうか。少なくとも、この言葉が、文字通りの離別以外に、あるいはそれと同時に、ジャック・カーズデイルとルーシー・モクヌイの深い結びつきを顕わにしたことは間違いない。

「認知」がもたらしたカーズデイルのこの驚愕・恐怖により際立つのが、伏線として張られていたムカデのエピソードとの大きな溝である。毒を持つムカデを恐れないカーズデイルは腰抜けでも臆病者でもないが、そんな彼が打ちのめされるほどの恐怖をハンセン病は人に与えうる。その恐怖の大きさを劇的に伝えるためにムカデが比較対象の一方として設定されていた。エンディングにおいて比較対象のもう一方としてハンセン病が提示された結果、そこに毒のあるムカデあるいはムカデの毒とらい菌に感染したルーシー・モクヌイあるいはルーシー・モクヌイの持つらい菌、の鋭い対照が浮かび上がる仕掛けである。毒と病原菌の対照と付随して明らかなのが、女性の人種の対照である。カーズデイルはムカデの毒を恐れずドッティー・フェアチャイルドという、明示されていないが白人と思われる女性を救い腕が腫れ上がるという犠牲を払った。が、ハワイ先住民であるルーシー・モクヌイについては、親密な関係にあったと思われる彼女を救おうとするどころか自らの罹患の可能性に怯え、ハーヴィ先生のもとへ検査をしてもらうために冷や汗を流しながら馳せ参じようとしている。これにより、白人はムカデの毒から救われ、ハワイ人あるいはポリネシア人はらい菌から救われないという構図がはっきりする。

また、その感染に対する恐怖により、カーズデイルの偽善ないし自己欺瞞が暴露され、彼のハンセン病患者に対する優位性だけでなく、読者による彼の印象も覆る。上述したように、モロカイ島への隔離政策を擁護し島での生活が幸福であることを語り手に主張していたカーズデイルが、自分がそこへ送られるかもしれないという事態になり震え上がっているからである。ハンセン病患者を見送る側

から、検査の結果次第では、ハンセン病患者として見送られる側へ、勇敢であると称賛される人物からその偽善・自己欺瞞が批判される人物へとカーズデイルの立場は「逆転」し、筋（プロット）についても「逆転」（どんでん返し）が起こっていると言える。

さらに、カーズデイルの政治への関りや知識の皮相さ・限界といったものも諷刺されている。政治の話に夢中になってはいるが、その政治ではルーシー・モクヌイだけでなく自分の運命もどうにもできないからである。また、その頭には「ハワイに関する重要な統計データと学術的な情報が詰めこまれ」(179)、「ハワイについての他のあらゆる話題と同様、カーズデイルはハンセン病に関しても百科事典的知識を持っていた」(180) にもかかわらず、ルーシー・モクヌイがハンセン病に罹患しモロカイ島へ送られることや自身も感染の可能性があることをまったく知らなかったからである。小説最後のカーズデイルの独白「それにしても知らなかった、まるで知らなかった」は、「認知」以前の自分の無知に呆然とし、情況の「逆転」により「苦難」に沈む彼の境地を象徴している。

このように、エンディングにおいて驚愕し恐怖する姿により、偽善や自己欺瞞、無知をさらけ出し、批判・笑いの対象、風刺の攻撃目標となったカーズデイルは、読者の目に「王」の資格を失っているように映るだろう。

Ⅵ　おわりに

ジャック・ロンドンの短編「さよなら、ジャック」は、ルーシー・モクヌイが女王のごとき地位から転落すると同時に、ハワイにおける産業界の大立者として君臨してきたジャック・カーズデイルも「王冠」を「剝奪」される物語である。ただし、カーズデイルの場合、モロカイ島へ行くか否かの運命はまだ決していない。小説がオープン・エンディングである以上、彼が検査後ハンセン病患者としてモロカイ島の隔離施設へ送られる可能性は閉ざされていない。この島がカーズデイルにとっての「楽園」となり、そこでルーシー・モクヌイとともに満ち足りた生活を送ることにさえなるかもしれない。その時、モロカイ島はそこへ向かうときは悲しくても行けば幸せな生活を送ることができ離れがたくなる「すてきな場所」(181) である、という彼自身の言葉の正しさが証明されることになるだろう。ジェイムズ・スラーゲルによれば、結局はマリヒニ（よそ者）でしかなくハンセン病者ではないカーズデイルに対して読者は好感も同情も持ちえない (Slagel 188-89)。しかしながら、中国に渡り戻って来られる当てのない「コナの保安官」のライト・グレゴリーよりも、モロカイ島で暮らし「土地の人」になる可能性を持っているのがカーズデイルなのではないだろうか。

もちろん、検査の結果陰性となりカーズデイルがオアフ島にそのまま居座ると考える方が現実的かもしれない。その場合、この物語の筋（プロット）は、冒頭の語り手の「物事の筋が通っていないというのではない」という陳述とも符合し、多くの先住民がモロカイ島へ送られる一方、多くのマリヒニ（よそ者）がオアフ島に残るというアメリカ帝国主義下の「逆さま」な国ハワイの現実を反映しかつ肯定することになるだろう[(10)]。だが、先に述べたように、その偽善や自己欺瞞、肝心なことに関する無知が明らかになったカーズデイルは、象徴的に「王冠」を剥奪されていると言える。その意味で、「逆さま」な状態に変化は生じている。上下逆だった関係が、完全ではないにせよ、あるいは一時的にせよ、揺るがされているからである。

とすると、「逆さま」な状態で物事の筋が通っていると主張しハワイの現状を肯定する語り手の権威も、カーズデイルの権威とともに問題化され揺らいでいると考えるのが筋である。つまり、カーズ

デイルの権威の失墜に関する現状転覆的・批判的な語りは、冒頭の現状肯定的・帝国主義的語りと齟齬をきたすため、語り手はその自己矛盾により、あたかもカーズデイルの分身であるかのように、彼と同時に信頼性＝権威を失っている。実際、エンディングの場面で馬車に向かうカーズデイルに小走りで追いつこうとする語り手は、カーズデイルの影のようである。冠を脱がされあざ笑われるカーニバル劇の道化 (11) のごときカーズデイルに寄り添い、波止場からそそくさと退場する語り手の姿に、読者がカーズデイルに対してと同様に批判や嘲笑、軽蔑の視線を投げかけても不思議ではない。その後、馬車の座席で苦悶するカーズデイルを見守る語り手が明かす「話すことなどなにもなかった」という事実は、言葉での表現が本分である語り手の存在意義の消失を意味し、その権威の失墜＝奪冠を象徴していると捉えられよう。

ルーシー・モクヌイの「さよなら、ジャック」という発話は、第一義的には自らの奪冠を受け入れた彼女による別れの言葉であるが、その一方でジャック・カーズデイルの動揺＝奪冠の誘因となる言葉でもあり、同時に、ジャック・カーズデイルが「王」として君臨することを合理的とみなしていた語り手もしくは作者ジャック・ロンドンのまさに「筋」（プロット）を通らなくし、脱線させる言葉だということになる (12)。よって、語り手のこの冒頭の言明（「逆さま」であることが道理にかなっているハワイ）をも揺るがす契機となったこの「さよなら、ジャック」という言葉は、ルーシー・モクヌイ、ジャック・カーズデイル、そして語り手の三者の奪冠を指し示している。タイトルとして掲げられたのは、この重要な三重の意味作用を持つがゆえであろう。

「はじめに」で紹介したように、柴田元幸はジャック・ロンドンという作家の技巧がしだいに上達していったと述べる。「さよなら、ジャック」は短いテクストながら、縦横に張り巡らされた伏線などが示すように、まさにその技巧が発揮された短編である。文学ジャンル的にも「メニッポス的諷刺（メニピアン・サタイア）」の要素が多分に盛り込まれているが、この点に関しては稿を改めて論じたい。ハンセン病三部作の比較分析やそのハンセン病表象の歴史における位置づけも今後の検討課題である。

註

（1）たとえば、今福龍太はこの作品に触れ、「ハワイ人コオラウが隔離を拒否して警察権力に抵抗して山中のカラカウ渓谷にたてこもった実際の出来事にもとづいて、社会矛盾と戦う者の勇気と抵抗心を美しく物語化した」と評価している（99）。村上春樹も自ら訳した「病者クーラウ」の「前置き」で、「ロンドンが共感し、心惹かれたのはたった一人で権力とシステムに挑み、戦い、結局は敗れていく個人＝虐げられた者に対してであり、その美学に対してである。僕はそのような彼の姿勢と、そこから生まれる凛とした文体を心から愛するものだ」と述べている（30）。

（2）国内では、大矢健がこの「三部作」を中心に、ジャック・ロンドンによるアメリカ帝国主義的自我の発見のプロセスを概観している。また、辻井榮滋は、三部作のうちの二短編の翻訳、ロンドンのモロカイ島ハンセン病患者隔離施設の実態レポート等に関する論考に続き、この三部作について論じている。

（3）アリストテレス 303-06。もちろん、「悲劇」と同様の形式ないし筋（プロット）を持つとはいえ、「さよなら、ジャック」はジャンルとしては「悲劇」よりも「諷刺」に近い。事実、「逆しまの世界」をはじめ「メニッポス的諷刺（メニピアン・サタイア）」と共通する諸要素を見出せる。この「メニッポス的諷刺」の枠組みの中では、カーズデイルの物語は「悲劇」のパロディとなるだろう。

（4）「さよなら、ジャック」（“Good-by, Jack”）からの引用は拙訳であるが、二つの既訳に多くを負っている。

（5）このクーデターで在ハワイ・アメリカ系白人住民がハワイ王朝を転覆し、1894年にハワイ共和国が成立した（山本・山田 84-88；矢口『ハワイの歴史と文化』187-91）。

（6）特効薬プロミンが米国で開発されるのは1943年のことであり、作品が書かれた20世紀初頭には治療薬や治療法が確立していなかった。そのことが罹患者の強制的な隔離政策につながり、当時らい菌に感染することはモロカイ島への隔離を意味した（猿谷 69）。

（7）「さよなら、ジャック」が収められている『高慢の館とその他のハワイ短編集』には「アロハ・オエ」という作品も収録されている。両作品はホノルルの波止場での別れという場面設定を共有しているが、それぞれの情景は対照的であり、「さよなら、ジャック」の波止場が暗く悲しみに満ちているのに対し、「アロハ・オエ」の波止場は賑やかで晴れやかである。

（8）猿谷『ハワイ王朝最後の女王』；矢口『ハワイの歴史と文化』188-94、『ハワイとフラの歴史物語』13-30、『ハワイ王国』89-100参照。矢口によれば、王朝転覆後もハワイアンのほとんどはリリウオカラーニを支持し続け、小説中でルーシー・モクヌイが一緒にアメリカを巡業したとされるロイヤル・ハワイアン・バンドのメンバーは、王に忠実であり、共和国政府への忠誠を誓わなければ解雇されるという脅しに決して屈しなかった（『ハワイとフラの歴史物語』20）。

（9）ロッド・エドモンドによれば、カーズデイルはハンセン病があたかも性感染症であるかのように反応しており、それはこの作品がハンセン病と性を結びつける慣習に依拠していることを示す（Edmond 200）。

（10）ロッド・エドモンドは、小説によるこうしたモロカイ島とオアフ島の二項対立の表象の含意について、ルーシー・モクヌイは消えゆく先住民の象徴であり、モロカイ島は多くの先住民が暮らすためある意味では理想的な場所であるのに対し、オアフ島のホノルルはもはやポリネシアではなく西洋の資本主義都市として対置されている、と述べている（Edmond 200）。

（11）バフチン 250-53。

（12）ジャック・ロンドンは1907年７月、モロカイ島のハンセン病患者収容所を訪問し、滞在中に「モロカイのハンセン病患者たち」を執筆した（雑誌発表は1908年１月、後に『スナーク号航海記』［1911］に収録）。この訪問・記事は、公衆衛生局長リューシャス・E・ピンカムがジャック・ロンドンに、モロカイ島に渡ってハンセン病患者たちと一週間暮らしその体験について書いてみてはどうかと打診し、ジャック・ロンドンがそれに応じて実現した（キングマン 333-34）。ロンドンはピンカム等の期待に応え、モロカイ島やそこに住む患者たちの否定的なイメージを払拭するために執筆することを決心し、様々な施設や組織が揃っていて生活環境が良好な事などを読者に訴えた（辻井「ハンセン病問題とジャック・ロンドン」193-97）。モロカイに関しての見方を共有しているジャック・カーズデイルは、そのジャックという名前が示す通り、作者ジャック・ロンドンの分身と捉えることができよう。ドッペルゲンガー的二人のジャックは、メニッポス的諷刺に頻出する自己分裂的もしくは自己言及的分身（ダブル）と見なすこともできるかもしれない。

引用文献

アリストテレス「詩学」藤沢令夫訳『世界の名著８　アリストテレス』田中美知太郎責任編集（中央公論社、1979年）

池澤夏樹・柴田元幸（対談）「どこまでもアメリカ的なジャック・ロンドン」『Monkey モンキー：特集

ジャック・ロンドン 新たに』vol.4, Fall/Winter 2014-15（スイッチ・パブリッシング、2014年）：98-105
今福龍太『群島－世界論』（岩波書店、2008年）
大矢健「ジャック・ロンドンの南海作品群とアメリカ帝国主義」『明治大学人文科学研究所紀要』第44冊（1999年）：59-74
ラス・キングマン『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家：写真版ジャック・ロンドンの生涯』辻井栄滋訳（1979；本の友社、2004年改訂）
猿谷要『ハワイ王朝最後の女王』（文春新書、2003年）
辻井榮滋「J・ロンドンのハンセン病もの短篇群を読む」『立命館経済学』（立命館大学経済学会）第57巻第４号（2009年）：485-96
--------「ハンセン病問題とジャック・ロンドン」『立命館経済学』（立命館大学経済学会）第56巻第２号（2007年）：184-99
ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳（1963；ちくま学芸文庫、1995年）
村上春樹「『病者クーラウ』前置き」（『Monkey モンキー：特集 古典復活』vol.7, Fall/Winter 2015（スイッチ・パブリッシング、2015年）
村上春樹・柴田元幸（対談）「帰れ、あの翻訳」（『Monkey モンキー：特集 古典復活』vol.7, Fall/Winter 2015（スイッチ・パブリッシング、2015年）；村上・柴田『本当の翻訳の話をしよう』に再録
村上春樹・柴田元幸『本当の翻訳の話をしよう』（スイッチ・パブリッシング、2019年）
矢口祐人『ハワイ王国：カメハメハからクヒオまで』（イカロス出版、2011年）
--------『ハワイとフラの歴史物語』（イカロス出版、2005年）
--------『ハワイの歴史と文化：悲劇と誇りのモザイクの中で』（中公新書、2002年）
山本真鳥・山田亨 編著『ハワイを知るための60章』（明石書店、2013年）
ジャック・ロンドン「アロハ・オエ」大野晶子訳『ジャック・ロンドン　ハワイ短篇集』（ハウオリブックス、2013年；Kindle版）
--------「コナの保安官」土屋陽子訳『病短編小説集』E・ヘミングウェイ、W・S・モームほか著；石塚久郎監訳（平凡社ライブラリー、2016年）
--------「さよなら、ジャック」辻井栄滋訳『ジャック・ロンドン多人種もの傑作短篇選』（明文書房、2011年）；「さよなら、ジャック」大野晶子訳『ジャック・ロンドン　ハワイ短篇集』（ハウオリブックス、2013年；Kindle版）
--------「病者クーラウ」村上春樹訳『Monkey モンキー』vol. 7 , Fall/Winter 2015（スイッチ・パブリッシング、2015年）

Edmond, Rod. *Representing the South Pacific: Colonial Discourse from Cook to Gauguin*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
London, Jack. *The Cruise of the Snark*. London: Penguin, 2004.
———. “Good-by, Jack.” *The Portable Jack London*. Ed. Earle Labor. Harmondsworth: Penguin, 1994. 178-86.
Slagel, James. “Political Leprosy: Jack London the ‘Kamaʻāina’ and Koolau the Hawaiian.” *Rereading Jack London*. Ed. Leonard Cassuto and Jeanne Campbell Reesman. Stanford: Stanford University Press, 1996. 172-91.